

多種多様な作品群

佃 典彦

初めまして、名古屋のミラーマン佃です。

OMS 戯曲賞の選考委員という大任に緊張しっぱなしで挑んだ選考会でした。

最終候補全体の印象はハードな内容ありナンセンスあり様々なタイプの戯曲が出揃っていてとても賑やかだなあという感覚でした。色んなタイプの劇作家が関西圏で活躍していて少々羨ましく感じました。

●FO ペレイラ宏一朗『どこよりも遠く、どこでもあった場所。あるいは、どこよりも近く、なにもない。』

主人公の男が家族の中で置いてきぼりになっていく感覚、周りのスピードについていけなくなる様子にはとても悲哀が込められていて僕にとっては非常に実感出来る内容でした。父親からも置いていかれ、妹からも取り残され、リフォームに夢中になる母からも乗り遅れてしまう。そんな中で彼がしがみついたモノはやはり映画であったワケですが、〈現実から取り残されて行く状態〉＝〈現実乖離〉＝〈ある種の虚構〉であると思われます。ならば主人公はそこでペンを取るのではなくて、その状況そのものをカメラに収めて行くという選択肢も良いのではないのでしょうか？主人公と妹が近親相姦的な会話があるのですが、別の選考委員の方から「関西独特のボケ突っ込みちやいますかね？」と指摘されて驚いちゃいました。

●田中浩之『サッカバカナ』

非常に面白く読みました。僕はこの作品を一等賞に推しました。とにかく人を喰ったようなセリフと先の読めない展開にワクワクしました。一見、思い付きでドンドン書いている感じがするのですが人間関係の推移などは非常に判り易く書かれています。冒頭から破綻している（或いは破綻願望のある）田中と実直なケースワーカーの坂本の二つの軸が、老人の死で繋がる構成も上手いと思います。演劇対話に身体がちゃんとくっ付いていて僕の琴線に触れるセリフも多くありました。この作家は〈人はどうやって死ぬか、どうしたら気持ち良く死ぬか〉について考察している様に感じます。そのテーマが先にあったワケではなくて書いているうちにそこに近付いていく作業だった様に思います。そこが今回僕が推した理由です。ラストの方で老人が居酒屋で出て行った坂本を待ちながら最後に焼酎を注文するシーンは泣けました。

●中川真一『Delete』

法廷劇として事件の解明と共にワタシの解明をしていく手法は面白いと思いました。父とサトミのトラックのシーンの見せ方がタランティーノ監督の映画みたいで素敵でした。

ただ、ト書きに書かれている九面パズルの舞台装置は果たして必要なのでしょうか？かえって複雑にしている様です。台本上の仕掛けが多過ぎて逆に損をしています。この家族の中でオトウトが唯一〈普通〉を手にしてしています。ワタシが欲しかった〈普通〉を…。

しかし現実的に考えたら果たして〈普通〉でいられるのでしょうか？

● 棚瀬美幸『さらば、わがまち』

俳優の仕事とは一体何だろう…読んだ後、真っ先に考えてしまいました。ここに登場する人物は全員本物です。本物というのは作家が思う所の社会的マイノリティーな人々。並べられた登場人物たちが本当にそこに属するかどうかは一つの問題点ではあるのでしょうかが敢えてそうであると考えた時に、では俳優の仕事とは？と考えてしまったということです。この戯曲を俳優が〈役〉として演じた時に、この戯曲は成立しているのだろうか？という疑問がどうしても拭いきれません。企画としては刺激的だろうと思います。しかし戯曲として読んだ場合とは別モノであると僕は考えます。

● 中村ケンシ『かえりみちの木』

大きな木とベンチのある場所、上手く書かれたワンシチュエーションです。

最近、他の戯曲賞選考会でも場面がコロコロ変わる台本が多い中でやはりワンシチュエーション台本は戯曲らしくて僕は好きです。歩が何をこの場所に逃げて来たのか、結局美里と徹はどうなって行くのか、この先に白井はどうなるのか…等々、結果をハッキリ見せなくとも納得のいく終わらせ方になっているところが心地良いです。惜しいのは歩の成長（逃げて来てから次のステップに進める様になるまで）を軸に描かれた話だと思のですが、歩が人の話を聞いたり感じたりするだけで自分から行動を起こさないことです。歩が聞くことで里の状況が判る構成になっているのですが、やはり何か行動を起こして欲しいところです。何でも無い会話の中に意味深なセリフを混ぜながら関心を惹く方法とはや目新しく感じません。美里がフシギちゃんなのがそうなる要因なのかなと感じました。

● 魔人ハンターミツルギ『ねこすもす』

これはもう冒頭を読んだ時には天才的だと思いました。別役さんの卓袱台返し、それでいて先が全く読めない展開にシビレました…が、途中からドンドン失速してしまった感じでした。有りがちなパラレルワールドに落ち着いてしまいました。ラストのモノレールとかコスモス畑は強引過ぎます。

コント的な要素は面白いのに持久力が無いというか、非常に勿体無い作品でした。

● 山崎彬『ラスト・ナイト・エンド・ファースト・モーニング』

ドラマ展開は面白いです。でもテレビドラマのシナリオを読んでいる様で僕は苦手でした。この物語をワンシチュエーションで示すとしたら、どこの場所で描くのがベストであ

るのか？そういう観点で構成を見つめ直すのも一つの手ではないでしょうか？会話は非常に上手いと思います。肝心なのはシチュエーションにおける人物の行動に納得させる力があるかどうかだと思います。例えば風花と春男の出会いですが、首吊り自殺した夫、彼のスマホを手にした男からの電話、男は見知らぬ男、この出会いからこんな美しい展開になるのが僕にはちょっと理解出来ません。乾潤についてですが、やはり犯人を殺してやろうと思ったなら石部に依頼するのではなくて自分の手で殺すべきだと思うのです。そこに矜持を感じたいのです。

●山本正典『しずかミラクル』

このナンセンス感、僕は大好きでした。短いセリフの積み重ねで終末感が滲み出ています。ト書きも面白くて、そのままセリフにしても良いだろうと思う部分もありました。タイムトンネルにしろ、宇宙人のアンテナにしろチープに創ることで非常に上手く嘘に嘘を重ねていると思います。作家は独特の文体を手にしていて羨ましい限りです。しかしながら名犬ポチが時間神様だったという辺りから息切れしてきてる感じがしました。物語の終わりの方になるにつれてバラ撒いた種を回収している様で徐々にナンセンス感も面白さも薄れてしまった感じがします。

●横山拓也『逢いにいくの、雨だけど』

セリフも上手いし、何より細かいニュアンスが俳優に要求される作品だなと思いました。まるでアルミ箔の様に。

一つ間違えると簡単に破れてしまう。そんな作品なので、もしかしたら僕のニュアンスの感じ方が間違っているかも知れません。僕は悠太郎と和子の関係が純粋な友達同士には感じられませんでした。そんなニュアンスで読みましたので、どうしても物語の軸がブレてしまっているように感じられてしまいました。悠太郎と和子ではなくて悠太郎と秀典が親友だったり、信頼し合ってる先輩と後輩だったりしたら〈子供の事故で壊れゆく関係〉がどう展開するのだろうかなどと勝手に考えたりしてしまいました。シーンの子供同士がペンを取り合って目を怪我する部分は不必要な気がします。たとえ、声だけだとしても。

しかし重くて深いキズを表面的に軽く見せるのは作家のウデだなと思います。